

九州大学経済学部古文書について：その来歴と編成

古賀，康士

九州大学附属図書館記録資料館産業経済資料部門：助教

<https://doi.org/10.15017/1901280>

出版情報：九州大学附属図書館研究開発室年報. 2016/2017, pp.19-27, 2017-08. 九州大学附属図書館
バージョン：

権利関係：Creative Commons Attribution-NonCommercial-NoDerivatives 4.0 International



九州大学経済学部古文書について —その来歴と編成—

古賀 康士[†]

<抄録>

九州大学経済学部経済史研究室が中心となって収集したコレクションについて、その来歴と編成を中心に検討した。その結果、本コレクションが1920年代から約半世紀に渡る資料収集を通じて形成されたものであり、北部九州を中心に近世から近現代までの豊富な記録資料を含むことを示した。また図書分類法によって記録資料の編成がなされたことによる課題点などを確認した。

<キーワード> アーカイブズ、記録資料、大学と地域、MLA 連携

On the Historical Resources of Economic Faculty at Kyushu University: its Archival History and Formation.

KOGA Yasushi

1. はじめに

小稿の課題は、九州大学経済学部経済史研究室において戦前から収集された記録資料のコレクションについて、その来歴と編成を中心に検討することである。

九州大学には戦前以来収集された膨大な記録資料が残されている。江戸時代の史料に限ってみても、九州文化史研究所（1934年設立）などが収集した藩政史料や地方史料があり、収蔵資料の豊富さと多彩さにおいて、全国的にも有数の資料所蔵機関になっている¹。こうした九州大学所蔵の記録資料のうち、ここでは経済学部経済史研究室が中心になって収集したコレクションを取り上げる²。

本コレクションには、博多商人の史料の一つ「釜惣文書（瀬戸文書）」や、部落史研究の基礎史料である「筑前国革座記録」、さらに「筑豊御三家」の一つで地方財閥として地域経済を牽引した貝島家の資料「貝島家文書」など、北部九州を中心にして、近世から近現代に及ぶ貴重な歴史資料が数多く含まれる。また、記録資料のほかに、和書・漢籍類も少なくない。

本コレクションはこれまで経済学部経済史研究室などで管理されてきたが、その保管・維持に尽力した教職員が退職するなかで、徐々にその収集経緯やコレクションの全体像が不分明になりつつある。

そこで小稿では、記録資料を中心に九州大学経済学部で収集・形成された資料の来歴と編成について基礎的な考察を行い、合わせてこのコレクションに含まれる主要な資料群の概要を報告する。いわば、資料の外

部にある様々な記憶や情報を記述化することで、今後の本コレクションの調査研究の一助とするのがねらいである。

なお本コレクションは、正式な名称がまだ定まっていない。ただ、これまで本コレクションの資料に対しては、「九州大学経済学部蔵」や「日本経済史研究室」に架蔵・所蔵されたものと記載する例が見られる³。また後述するように、1980年代以降、本コレクションを保管した石炭研究資料センターでは経済学部の「古文書」として管理していた。こうした経緯を踏まえ、ここでは本コレクションを「九州大学経済学部古文書」と便宜的に仮称することにしたい⁴。

以下、まず経済学部古文書の来歴を検討し、次いで全体の編成について概観する。そして、主な資料群について簡単に解説を加え、最後にいくつかの課題を展望しておきたい。経済学部古文書は概算でも1万点近くに達すると予想され（枝番史料を含む）、全貌を明らかにするにはなお継続的な調査が必要となる。そのため、小稿の内容はあくまで今後の調査方針を見極めるための中間報告に止まることに留意されたい。

2. 資料の来歴

2.1. 戦前からの資料収集

現在確認できる範囲で、経済学部古文書に含まれる資料の収集は1927年頃からはまったようだ。本コレクションの資料には、その殆どに図書用の受入印が押されており、各資料の受入年月日が判明する。九州帝国

[†] こが やすし 九州大学附属図書館付設記録資料館産業経済資料部門・助教 (〒812-8581 福岡市東区箱崎 6-10-1) E-mail: koga.yasushi.122@m.kyushu-u.ac.jp

大学法文学部は、1924年に設立し、翌年4月に開講した⁵。経済学部古文書は、戦前の法文学部の創設とともに、コレクションとしての歩みを始めたことになる。

戦前における資料収集には、法文学部経済科において経済史を担当した教官が主に当たったようだ。とりわけ、日本経済史を専門とする遠藤正男と宮本又次が、受入資料の選定などにおいて中心的な役割を果たしたと考えられる⁶。

遠藤正男は、1901年新潟県に生まれ、1929年九州帝国大学法文学部経済科を修了したのち、1930年助手、助手・講師を経て、1936年助教授となった。遠藤正男は「日田金」を対象とした江戸時代の商業資本の歴史分析のほか、筑豊石炭鉱業史・福岡藩の藩札の研究などにおいて先駆的な業績を残した。その研究は実証性に富み、現在も高い評価を受けるが、1939年短命にして亡くなった。

宮本又次は、1907年大阪市に生まれ、1942年助教授として九州帝国大学に着任し、1945年教授となった。宮本又次は株仲間の研究など、日本商業史をライフワークとした。九州へ着任後は九州経済史の研究にも精力的に取り組み、門下生や若手研究者とともに、数多くの研究成果を挙げている。1951年、大阪大学に転出している。

遠藤正男・宮本又次らによって戦前に収集された資料には、「釜惣文書（瀬戸文書）」（1934年1月受入）「筑前国革座記録」（1942年8月受入）など、北部九州の近世史料として貴重な資料が少なくない。その収集方法については記録がないが、資料の現状などから判断する限り、原蔵者からの寄贈や古書店を介した購入が主であっただろう。

なお、戦前の経済史研究室の収集資料を考える上で、九州文化史研究所との関係が重要となる。事実、1934年の九州文化史研究所の設立に際し、経済史研究室に寄贈されていた千原家文書、楠野家文書、古野家文書が文化史研究所に移管されており、両者の密接な関係が窺える⁷。こうした記録資料をめぐる両者の分業・協力関係はこれからの検討課題である。

2.2. 戦後の収集と保管状況

戦後の資料収集には、秀村選三が中心的な役割を果たした⁸。秀村選三は、1922年福岡市に生まれ、宮本又次の指導を受けたのち、1951年助教授、1966年教授となった。その研究領域は幅広く、近世・近代における下人・奉公人の歴史分析から、「西南辺境地域」の特質解明、鹿児島藩の農村社会の実態分析のほか、エネルギー革命のなかで急速に衰退しつつあった石炭産業に関わる史資料の収集・保管・調査にも尽力し、近代日本における石炭産業の歴史的意義の解明にも注力し

た。

こうした秀村選三の学問のあり方を反映して、戦後の収集資料は九州各地の近世地方史料から近現代の筑豊石炭関係史料にまで広がっている。これによって経済学部古文書の記録資料も質・量ともに充実することになった。

この時期に受け入れられた資料としては、「三苦家文書」（1969年3月受入）、「平戸捕鯨会社記録」（1972年10月受入）、「貝島家文書」（1973年3月受入）などがある。資料の収集方法は、戦前と同じく、原蔵者からの寄贈や古書店からの購入が基本であっただろう。

これらの収集資料については、経済史研究室と経済学部図書室が中心となって保管・管理を行ったと考えられる。また1967年、経済学科に日本経済史講座が設置されると、同研究室が設けた「古文書室」へと保管場所が移されたようだ。経済学部古文書を管理する図書カードにも、「別置 古文書室」と押印されているものが多数見受けられる。

こうして戦後も数多くの資料がコレクションに加えられたが、資料の受入印によると、1970年代中頃から受入資料が殆ど確認されなくなる。おそらく「古文書室」への新規の資料受入はこの時期までであっただろう。

新たな資料受入が途絶した背景には、九州大学における地域資料の収集主体が変化したことが指摘される。1979年4月、石炭資料の収集・整理・保存・調査研究を目的として石炭研究資料センターが設立された。これ以降、石炭研究資料センターは当時散逸・消滅しつつあった石炭関係資料を対象に旺盛な収集活動を展開する。経済史研究室が担ってきた資料収集の機能も、この石炭研究資料センターの設立を機に、同センターに移ったと見るべきだろう。

新規受入がなくなるなか、資料の保管場所にも変遷があった。しばらくは「古文書室」において保管がなされていたが、1980年代後半、経済学部において小講座制から大講座制への機構改革が実施された影響で「古文書室」での保管が困難となると、石炭研究資料センターに保管場所が移されることになった⁹。また2005年、九州大学内の記録資料の一元的な管理を目指して記録資料館が設立されると、資料の保管場所は同センターから記録資料館へと引き継がれることになった。

3. 資料の編成

次に経済学部古文書がどのような編成方法によって保管・管理されてきたかを見ておこう。

表1 九州大学経済学部古文書の保管状況(石炭研究資料センター保管時)

箱No.	箱ラベル名	収納資料(請求記号別)	主な収納資料
1	古文書	020/C/1, 020/J/4, 020/R/3	「放事新書」など刊本類
2	古文書	020/R/4~6	「芝峯類説」など刊本類
3	古文書	020/R/7~9	「六典条例」(高宗4年)など刊本類
4	古文書	090/A43/1, 090/Ku 34-2/1	「大韓歴史略」など刊本類, 「朝鮮人渡良大嶋漂着船書留」(天保11年)など
5	古文書	090/Ku 34-3/1~, 090/Ts 91/5	宝暦期熊本藩村別田畑畝数改帳, 「熊本県布達綴」など
6	古文書	105/L/2, 105/T/23	「農工商経済論」
7	古文書	110/A/9, 110/A/13, 110/C/4, 110/C/6, 110/C/7, 110/C/9, 110/C/不明	「筑紫那珂珂村上野家文書」, 「上座郡古賀村郡鑑」(享保9年), 「赤穂藩倭約申合之写」, 「秋月藩清田家文書」, 「筑紫郡安徳村松木富田家記録」, 「筑前国糟屋郡新宮村塚家文書(12綴)」など
8	古文書	110/C/12	「筑前国革座記録」
9	古文書	110/F/12~110/N/10	鎌田家文書(福岡藩家老カ), 「糟屋郡下原村安松家文書」など
10	古文書	110/O/12~110/T/54	「室谷家文書(大阪市堂島)」, 「末松政右衛門家文書(糸島郡加布里村)」, 「塩浜御連上御年貢扣(赤穂田淵新四郎家文書)」など
11	古文書	110/K/43	釜惣書簡類(虫損につき劣化あり)
12	古文書	111/G/11~111/Y/7	鎌田家文書, 「関西問答 全」など刊本類
13	古文書	117/C/1, 117/O/20, 117/T/16, 118/F/64, 118/F/96, 118/I/23, 118/K/47, 118/K/125, 118/Y/19	「道中日記」(長崎・大坂間旅日記ほか), 「江原道誌」・「琉球藩史」・「島津国史」など刊本類ほか
14	古文書	119/A/1~9, 119/B/1~8, 119/C/1~9, 119/D/3~7	甘木銀行・下座銀行・福岡県農工銀行営業報告書(明治大正期)など刊本類, 「筑前国田島御控帳」, 「銅山図録」ほか
15	古文書	119/E/1~3, 119/F/1~22	「愛媛県勸業年報 第弍号」(明治12年)・「農会(福岡県朝倉郡農会決議録)」大正7~11年)など刊本類, 「穂波郡御免帳書抜」ほか
16	古文書	119/F/23~37	「企救村会決議録」(明治40年)など明治大正期福岡県内自治体決議録, 筑前国鞍手郡上有木村文書ほか
17~19	古文書	119/F/38	「福岡県産炭地関係資料」(昭和戦後報告書類)
20	古文書	119/G/1~9, 119/H/1~9	「肥後木蠟関係文書」(近世近代)ほか
21	古文書	119/H/10~19	「平戸捕鯨会社記録」ほか
22	古文書	119/H/20~21, 119/I/1~11, 119/J/1~6	「現行類集 大分県官令全集」(明治26年)など刊本類, 「御國中郡夫・村夫取分定書」(明和7年)ほか
23	古文書	119/K/1	「加賀藩農政経済史料」(戦後刊行の史料集)
24	古文書	119/K/1(一の十五~二の九)	「加賀藩農政経済史料」(戦後刊行の史料集)
25	古文書	119/K/1(二の十~二の十九)~119/K/7	「加賀藩農政経済史料」(戦後刊行の史料集), 「鹿児島県下東嶺郡文書」(明治期村役場文書など)ほか
26	古文書	119/K/11~119/K/37	「兵学目録授与一件」(鎌田昌純), 「木下文書」(柳川藩商家文書カ), 「貨幣図録」など刊本類ほか
27	古文書	119/K/38, 110/K/39(1~9)	「貝島家文書」ほか
28~38	古文書	119/K/39(10~369)	「貝島家文書」
39	古文書	119/K/40~, 119/M/4	「明治十六年以降 佐賀県現行法規索引」(明治31年刊)・「蝦夷風俗彙」など刊本類
40	古文書	119/K/41	「上有木村文書」(「御米収納引附帳」安政5年など, 幕末維新期帳簿類)
41・42	古文書	119/M/5	「加賀藩治要資料」(戦後刊行の史料集)
43	古文書	119/M/30~119/O/23	「華夷通商考」など刊本類, 「老松宮神社座帳 井上村」(明治10年)ほか
44	古文書	119/O/24~119/S/23	「新貨条例」(明治4年刊)など刊本類, 「三苦家文書」ほか
45	古文書	119/S/24~119/S/30	「佐賀県告示」(明治42年1月~6月, 入野村役場), 「郡庁達」(明治17年7月以降, 江島郡外二郷戸長役場)ほか
46	古文書	119/S/30	佐賀県議会関係資料
47	古文書	119/S/30~119/S/37	佐賀県議会関係資料, 「明治廿一年 佐賀県統計書」ほか
48	古文書	119/T/1~119/Y/9	「銀行小言」(明治18年刊)など刊本類
49	古文書	119/K/47~119/K/58, 119/M/31~34, 119/N/1~11, 119/O/15~31, 119/T/5	「第叁拾四期営業報告書」(八女郡水田村古嶋銀行, 大正6年下半期)など刊本類, 「農治秘要」(福岡藩富田性)ほか
50	糸島郡三苦家文書	119/B/2~4, 119/D/1, 119/G/5~6, 119/K/8, 119/M/6, 8~11, 119/M/15, 17~19, 22~28, 119/N/9, 119/O/10~12, 14, 16, 18・19	「三苦家文書」
51	古文書	119-c/B/9・10, 119-c/R/5~7	「熱河日記」など刊本類
52	古文書	121/I/40, 142/K/6・7, 311/D/1, 311/J/6, 311/J/7, 311/T/4, 620/F/1, 821/K/29, 850/F/3	生吉銀行・大成銀行・大石銀行・田主丸貯蓄銀行資料など刊本類, 「鉱山紀年録 序」(写本)ほか
53	古文書	釜惣文書	外容器(木箱)ほか
54	古文書	鞍手郡上有木村関係資料	書綴類一括(090/A 71/1)
55	-	(未登録資料)	近世近代資料
56	標本・古文書	イ60~イ62	「旧紙幣見本帖」満洲中央銀行, 石川県地券, 近世近代地方史料(未整理)など
57	古文書	三池郡松尾家文書 No.1	「永代証文帳」(文化3年)ほか
58	古文書	三池郡松尾家文書 No.2	「日記雇入扣」(明治19年)ほか
59	古文書	八女平田家 No.1	「金銀出入帳」(明治19年)ほか
60	古文書	八女平田家 No.2	「大福日記帳」(明治19年)ほか

注: 箱No.は保管時の配列と収納資料の請求記号などに基づく仮番である。同じ資料群が複数の箱に収納されている場合は、まとめて記載した。

箱ラベル名・収納資料(請求記号別)は、基本的に石炭研究資料センターで作成されたと推定される保存箱ラベルの記載内容を掲載した。

一部、収納資料に異動が生じている。"- "は箱ラベルに記載がないことを示す。

資料名は原則として受入時の登録名に拠るが、一部、原標題に基づき変更・修正を加えている。

まず、経済学部古文書の編成を考える上で注意すべきは、ほぼ全ての資料に対し、図書分類法に基づく請求記号が与えられていることである。これは図書・和書・漢籍類だけでなく、記録資料も同様である。

表1は、この点を確認するため、石炭研究資料センター保管時の経済学部古文書の状態を示したものである。経済学部古文書は、同センターの文書箱60個に収納されて保管され、現在も基本的にこの保管状態が維持されている。表1には各箱に収納された資料の請求記号と主な資料名を示している。「020/C/1」（箱No.1）などが受入時に与えられた請求記号になる。

この図書分類法は、1970年代頃まで経済学部図書室で使用されたもので、現在「旧分類」と呼ばれる。この旧分類では、020は「全集、叢書」、110は「経済史」、118は「地誌、地方史」といった分類が当てられた¹⁰。請求記号は、この旧分類の基づく3桁の分類番号と、資料の標題や作成者のアルファベット表記（A～Z）、そして同一の分類・アルファベット内の受入の順番（1～）によって決定される。

原則として、この旧分類による請求記号は図書・記録資料の区別なく与えられた。そのため、コレクション全体の編成を考える上で、次のような特徴が生じることになったことに注目しておきたい。

一つは、図書と記録資料の混在状況である。経済学部古文書には、記録資料だけでなく、和書・漢籍や近現代に発刊された歴史資料集も含まれている。こうした図書類は、内容などから「古文書室」などで記録資料と一緒に保管・活用されたものと推測されるが、同じ図書分類法によって請求記号が与えられているため、資料編成上においても混在が発生している。

またこの混在状況は、原理上、旧分類で整理された経済学部の全ての図書にも当てはまることになる。いわば、経済学部古文書は、記録資料も含めて、経済学部の図書全体のなかに組み込まれているのである。表1の請求記号には不連続の番号が散見されるが、これはこうした事情による。

もう一つは、個々の資料に請求記号が与えられたため、一部の資料群で出所が不明となっていることである。経済学部古文書には、「秋月藩清田家文書」（110/A/13、1935年11月受入）や、「筑紫郡安徳村松木富田家記録」（110/C/4、1935年6月受入）というように、資料群ごとに同一の請求記号が付されているものがある一方、資料群の下位の個別資料に固有の請求記号を付している場合がある¹¹。

「三苦家文書」などは個別資料にまで請求番号が付され、資料群のまとまりが不明となったケースに該当する。この点を配慮してか、現在「三苦家文書」は請求記号を超えて同じ文書箱で保管されているもの

（表1・箱50参照）、なお出所が異なる資料の混在などが確認された。

以上、経済学部古文書の資料編成の概要とその特徴・問題点を検討した。資料編成としては、旧分類と呼ばれる図書分類法によって記録資料が分類・編成されていることに本コレクションの大きな特徴がある。これによって図書と記録資料の混在や出所不明の資料が発生するなどの問題点が生じている。

ただし、この資料編成に起因する問題点を解消する上で、各資料が持つ請求記号や受入年月日、現在の保管状況などが資料群の復元に重要な手掛かりとなることに注意しておきたい。例えば、請求記号から判明する資料の受入時期の前後関係は、資料群を比定するにあたって大きなヒントとなる。今後は現在の編成・保管状況を維持しながら、慎重に調査を進めることが肝要となる。

4. 主な資料群とその概要

経済学部古文書に含まれる記録資料には、数多くの資料と資料群が包含されており、その内容も多様性に富む。ここでは比較的にとまった資料群について簡単な概要説明を行うことで、その一端を示すことしたい。これによって本コレクションの重要性も再認識されるであろう。以下、時代順に主な資料群の紹介をしていこう。

4.1. 釜惣文書(瀬戸文書)

「釜惣文書(瀬戸文書)」（110/K/43）は、江戸時代中後期の博多商人瀬戸（釜屋）惣右衛門家の文書群である¹²。受入は1934年1月。この時期に教鞭を執っていた遠藤正男が受け入れに関わったと推測される。

「釜惣」は鉄問屋と燻燻板場を営み、中国地方・上方とも活発な取引を行った博多商人で、幕末期には福岡藩の燻燻会所改革などに関与して経営を拡大させた。

空襲の被害を受けた福岡・博多では近世史料の伝存数は決して多くない。そのため、「釜惣文書(瀬戸文書)」は江戸時代中後期の博多商人の経営や活動を窺える格好の史料の一つに数えられる。

現在までに、「釜惣文書(瀬戸文書)」の一部は、福岡県史の編纂を行った福岡県地域史研究所において仮目録が作成され、『福岡県史』近世史料編に主要な史料の翻刻が収載されている¹³。これまでに整理が完了した史料は、江戸時代の書状や借用証文などを中心に約3700点である（枝番史料を含む）。

これとは別に経済学部古文書には、未整理の書状・証書類と「釜惣文書(瀬戸文書)」を収めていた外容器の木箱が保管されている（図1参照）。未整理の書状・

証書類には虫損による劣化が見られるが、今後、貴重な博多商人の資料として調査・分析の進展が期待される。



図1 「釜惣文書（瀬戸文書）」を収めた木箱の一つ

4.2. 筑前国革座記録

「筑前国革座記録」(110/C/12)は、筑前国革座を引き受けた博多商人柴藤増次家が編纂したとされる資料で、江戸時代の皮革産業と部落史を研究する上で基礎資料一つである。受入は1942年8月。戦後、同資料の翻刻・刊行に携わった秀村選三によると、戦時中、当時九州大学で教壇に立っていた宮本又次が博多の古書店より購入したものという¹⁴。本資料については、『筑前国革座記録』(上巻・中巻・下巻、福岡部落史研究会、1981-1984年)として全文が翻刻・刊行された。

現在、保管されているのは堅帳50冊と木箱1点である。目立った虫損などはなく、資料の状態は良好である(図2参照)。『筑前国革座記録』刊行時の状態のまま、保管されていると考えていいだろう。



図2 筑前国革座記録・巻1～巻3

オリジナルの記録資料が持つ情報は豊富である。かつて『筑前国革座記録』の成立過程を再構成するにあたって、各巻の紙質や形態など、オリジナルの資料だけが持つ情報が決定的な役割を果たした¹⁵。記録資料は、その付属資料を含めて、適切かつ恒久的に保管

していかなければならないことを示す好例といえよう。

4.3. 三苦家文書

本資料は、筑前国糸島郡井原村三苦家に伝わった地方史料である。年貢、酒造業、奉公人関係などの帳簿類などからなる。受入は1969年3月。玉泉館資料(九州大学教養部旧蔵)にも同族関係にあった「三苦文書」がある(計3415件)¹⁶。経済学部古文書の「三苦家文書」を受け入れに関わった秀村選三によると、経済学部古文書分が三苦家の本家、玉泉館分が分家の資料に相当する¹⁷。

表2に、経済学部古文書に含まれる「三苦家文書」の概要をまとめた。同文書は、いずれも旧分類119番台に分類されているが、資料の標題や作成者(冒頭のローマ字表記)に基づき、アルファベットの請求記号が付されている。例えば、「米銭取立帳」14冊は119/B/2、「男女勤休日雇帳」13冊は119/D/1となる。119番台には他の資料群の文書も分類されているため、先述の通り、資料群の混在が発生し得る状況にある。ただ、「三苦家文書」については、現在の保管状況と受入年月日、および資料の内容から資料群の判定がおおよそ可能である¹⁸。

なお「三苦家文書」については、このほかにも同一の出所を持つ資料が確認されている。今後、これらの資料についても必要な情報収集を進め、一体的に活用できるよう進める予定である。

4.4. 平戸捕鯨会社記録

本資料(119/H/19)は、平戸捕鯨会社の明治20年代の「記録」のほか、その経営に携わった長崎県平戸村貞方家の経営に関する資料35件からなる。受入は1972年10月。資料には、「地行書店」や「(秀)」と鉛筆で記載があることから、戦後に秀村選三によって購入・収集されたものと考えられる。

表3は、「平戸捕鯨会社記録」の細目録である。各資料の番号は、仮1～12番までは既存の整理番号にしたがい、仮13番以降は内容と作成年代を規準に新しく仮番号を付した。

全35件のうち、「委任協議案編冊」(仮2)、[日誌](仮5)、「記録」(仮14)、「日誌」(仮15)などが、平戸捕鯨会社の経営史料にあたる。明治期の北部九州の捕鯨会社の一次史料は、小川島捕鯨会社や五島捕鯨会社のものが確認されるが、その数は多くはない。このなかにあつて、「平戸捕鯨会社記録」は、江戸時代以来の捕鯨業が近代移行期にどのように変化していったかを詳細に伝える資料となる。

表2 筑前国糸島郡井原村三苦家文書の資料一覧

(2017年12月現在)

請求記号	仮番	表題	年代	差出・作成	宛名	形態	数量	備考
119/B/2	1~14	米銭取立帳	[元治元年~明治16年]	三苦六治		長帳	14	
119/B/3	1~13	米銭万請払帳	[明治6年~同22年]			長帳	13	
119/B/4		文久三亥年方寅迄忠蔵殿 兩人二而酒造仕卯年方六 次老人二而酒造仕指引之 覚	申 [明治5年]			長帳	1	
119/D/1	1~13	男女勤休日履帳	[明治6年~同21年]			長帳	13	
119/D/6		田畑買戻并売渡控	明治8年亥9月			長帳	1	
119/G/5	1~5	下作定米請取帳	[明治13年~同22年]			長帳	5	
119/G/6		祇園宮拝殿再建諸入用控 帳	嘉永6年丑6月			長帳	1	
119/I/3	1~3	井原村島方名寄帳	[文化2年・文政5年]			書冊	3	
119/I/4	1~3	怡土井原村島方名寄帳	[文化2年・同13年ほか]			書冊	3	
119/M/6		御年貢下作人方証文請取 帳	明治7年戌9月吉日	三苦六三郎		長帳	1	
119/M/8		伊勢參宮ニ付見舞覚帳	弘化4年未ノ正月	三苦六次		長帳	1	表紙墨書「三苦六次参詣仕ル」
119/M/9		伊勢并四国参詣ニ付諸事 控帳	明治6年酉3月吉日	三苦六治, 同人妻		長帳	1	
119/M/10		伊勢・大社・四国・西 国・善光寺・高野山其外 諸々参詣雜用割合帳	明治6年酉2月11日方閏 6月26日迄	同行 三苦六治, 同 人妻, 向エ 三苦為 八郎, 妻, 三坂 惣 四郎		長帳	1	
119/M/11		井原村分御徳割帳	天保11年子ノ6月	三苦六次		長帳	1	裏表紙墨書「伍大力菩薩」
119/M/15		酒造入用金借入払出帳	文久3年亥8月吉日	三苦忠蔵, 同六次		長帳	1	
119/M/17		酒場用金銭指引帳	文久3年亥6月方	三苦六次控		長帳	1	表紙朱書「引合」
119/M/18		年々稲種子控帳	明治36年癸卯2月吉日	三苦亀太郎		長帳	1	
119/M/19		米銭万貸渡帳	安政7年申正月吉日	三苦六治		長帳	1	表紙墨書「式冊之内 式」. 裏表紙墨書「七 福寺」
119/M/22		高祖三雲三坂雷山御徳割 帳	天保11年子ノ6月	三苦六次		長帳	1	
119/M/23		追々貸渡米銭此節捨切ニ 仕候分書上帳	安政5年午3月	三苦六次		長帳	1	
119/M/24		三坂村江入庄屋役被仰付 候節諸方志之覚	安政6年未ノ8月吉日	庄屋 三苦六次		長帳	1	
119/M/25		三井吉太夫殿出財算用目 録帳	嘉永6年丑ノ8月	庄屋茂吉, 組頭六次		長帳	1	
119/M/26		村々定御年貢控帳	天保11年子ノ2月	三苦六次		長帳	1	表紙墨書「村々通帳写 置候」. 裏表紙墨書 「井原村 三苦六治」
119/M/27		年々米穀売立帳	明治3年午ノ正月吉日	三苦六七郎		長帳	1	
119/M/28	1・2	男女勤怠日履帳	[明治20年・同22年]	三苦亀太郎		長帳	2	
119/N/9		年々万水帳	明治5年壬申正月吉日			長帳	1	
119/O/10		御年貢御通	安政6年未9月	蔵元	六次殿	長帳	1	
119/O/11		御年貢米大豆請取通	明治3年午ノ9月	蔵元	三苦六七郎殿	長帳	1	表紙墨書「六七郎」
119/O/12		御年貢米大豆請取通帳 写	明治5年申9月		三苦六治殿	長帳	1	
119/O/14		御年貢指支ニ付米金借入 納方并貸渡分指引帳	明治2年巳12月			長帳	1	
119/O/18		御年貢米大豆払方小割 口々目録帳	天保13年寅ノ12月	相府 平蔵, 六次		長帳	1	
119/O/19	1~4	御年貢米大豆引附帳	[慶応3年~明治9年]	三苦六治		長帳	4	旧請求記号119/M/7
119/R/1		六月ニ福岡表廻勤御役々 様方進物之覚	[近世後期]			長綴	1	
119/S/11		酒造勘定帳	[文久3年~明治3年]			長帳	7	
119/S/12		酒代年々不足之覚	明治2年巳正月改			長帳	1	表紙墨書「地村中 下 村共」
119/S/13		焼酎并揚酒売立勘定帳	文久3年亥7月吉日			長帳	1	
119/S/14		酒場入用金子借用之覚	元治元年子12月			長帳	1	
119/S/15		諸々年々掛二相成申分書 出之覚	[近世後期]			長綴	1	
119/S/16		去子年非常損毛ニ付左之 通救切ニ遣申候	嘉永6年丑ノ3月			長綴	1	
119/S/17		去子年損毛ニ付左之通丑 ノ三月廿九日ニ渡方組合 之覚	[嘉永6年頃]			長綴	1	

典拠：九州大学経済学部古文書より作成。

注：典拠資料より、内容・受入時期・保管状況などから三苦家文書と比定できるものを選定した。調査の進展によって、資料の異動が生じる可能性がある。簡略化のため、同じ標題を持つ帳簿類についてはまとめて記載した。その際、年代は基本的に上限と下限のみを示した。

表3 「平戸捕鯨会社記録」の資料一覧

請求記号	仮番	標題	年代	作成	形態	数量	備考
119/H/19	1	諸願届其他必要書編冊	明治初年ヨリ	貞方文作	書冊	1	表紙朱書「第壹号」
119/H/19	2	委任協議案編冊	明治20年6月	平戸捕鯨会社 委員	書冊	1	表紙朱書「乙第六号」
119/H/19	3	諸受取書綴	明治30年1月	貞方文作	書冊	1	表紙朱書「第四号」
119/H/19	4	返済証書編冊	明治30年1月	貞方文作	書冊	1	表紙朱書「第五号」
119/H/19	5	〔日誌〕	〔明治28年3月7日～同年5月10日〕		書冊	1	
119/H/19	6	約定証書綴	明治30年1月	貞方文作	書冊	1	表紙朱書「第三号」
119/H/19	7	売買証書綴	明治30年1月	貞方文作	書冊	1	表紙朱書「第三号」
119/H/19	8	〔代表者選定届など綴〕	〔明治36年3月～明治37年7月〕		綴	1	
119/H/19	9	諸証書写編冊	明治43年4月15日調査以後編冊ス	貞方英信	書冊	1	
119/H/19	10	〔大正六年出納綴〕	〔大正6年〕		書綴	1	
119/H/19	11	明治八年地租改正現地地下調帳写	大正13年3月書抜き		書冊	1	表紙墨書「平戸村鏡川免薄香浦 自四百三拾五番・至四百五拾七番」
119/H/19	12	親戚・友人住所控簿	昭和5年1月	貞方	書冊	1	表紙墨書「貞方文作(忠静)ノ履歴ノ大体ヲ記ス」, 同「毎年々賀状出シタル姓名ヲ記ス」, 同「第貳号」
119/H/19	13	記録	明治24年4月	合資商業組合取締	書冊	1	下小口墨書「諸税金」
119/H/19	14	記録	明治25年1月	貞方	書冊	1	表紙墨書「一口借金ヲ記ス」, 同「昭和四年八月ヨリ 家賃請取りノ事ヲ記載ス」
119/H/19	15	日誌	明治26年4月13日ヨリ	生月捕鯨場 跡番	書冊	1	
119/H/19	16	無尽講二品加・銀行及組合業・諸講加入口・小作米口・免・日計簿 元帳	明治31年8月ヨリ	平戸村 貞方英信	書冊	1	表紙墨書「家賃請取」, 同「梅崎神社ノ経費」. 表紙朱書「第壹号」. 下小口墨書「卅一年八月ヨリ 銀行及諸組合業諸講会加入口 小作米口」
119/H/19	17	金銭出納差引扣帳	明治41年9月1日ヨリ, 明治43年4月1日ヨリ, 大正10年2月8日ヨリ大正11年4月30日迄	貞方文作	書冊	1	表紙墨書「第四号」. 背表紙墨書「明治十四年自一月 金銭差引扣帳」. 明治卅一年自一月 金銭出納差引扣帳」
119/H/19	18	所有地台帳	明治21年1月調	貞方英信, 貞方ヤス	書冊	1	
119/H/19	19	金銭出納簿	大正7年11月1日ヨリ全8年8月7日迄ニ終リ	北松浦郡平戸村鏡川免四百三十三番地同居 貞方文作	書冊	1	表紙墨書「依テ八月八日ヨリ第三号ヘ記ス 日々之重要ヲ単簡ニ記ス」, 同「第貳号」. 下小口墨書「第貳 金銭出納簿」
119/H/19	20	金銭出納簿 附日誌重要ヲ単簡ニ記ス	大正8年8月8日ヨリ全10年2月7日マテ終リ	北松浦郡平戸村鏡川免四約參拾參番地同居 貞方文作	書冊	1	表紙墨書「第參号」. 下小口墨書「第三日誌 金銭出納簿」
119/H/19	21	金銭貸借帳	明治31年8月ヨリ全37年3月20日迄	平戸村 貞方文作	書冊	1	表紙朱書「第四号」. 下小口墨書「第四金銭貸借帳」
119/H/19	22	金銭出納簿	〔大正11〕年5月1日ヨリ全年12月31日迄		書冊	1	表紙朱書墨書「第五号」. 表紙墨書(抹消済)「平戸漁業株式会社」. 下小口墨書「第五号 金銭出納帳」. 表紙貼紙外れ跡あり
119/H/19	23	漁獲元帳	大正12年1月1日ヨリ10月30日迄		書冊	1	表紙墨書「第六号」. 表紙墨書(抹消済)「中野村字古江 揚繰細方」. 下小口墨書「第六号金銭出納帳」. 表紙貼紙外れ跡あり. 標題は貼紙下部分より
119/H/19	24	金銭出納簿 並日誌	大正12年10月1日ヨリ全13年5月16日迄	平戸村 貞方文作	書冊	1	表紙墨書「第七号」. 下小口墨書「第七号金銭出納簿」. 表紙貼紙一部外れ(「貞方文作」)
119/H/19	25	金銭出納簿并日誌	大正13年5月17日ヨリ全14年9月30日迄	平戸村 貞方文作	書冊	1	表紙墨書「第八号」. 下小口墨書「第八号金銭出納簿」
119/H/19	26	金銭出納及日誌簿	大正14年10月1日ヨリ昭和2年2月28日マテ	貞方文作	書冊	1	表紙墨書「第九号」. 下小口墨書「第九号金銭出納簿」
119/H/19	27	金銭出納及日誌簿	昭和2年3月1日ヨリ全3年8月20日マテ	貞方	書冊	1	表紙墨書「明治六拾年 大正拾六年」, 「第拾号」. 下小口墨書「第拾号 金銭出納簿」
119/H/19	28	金銭出納及日誌簿	昭和3年8月21日ヨリ全5年3月30日	貞方	書冊	1	表紙墨書「明治六拾壹年 大正拾七年」, 同「第拾壹号」. 下小口墨書「第拾壹号 金銭出納及日誌簿」
119/H/19	29	金銭出納及日誌簿	昭和6年11月11日ヨリ	貞方	書冊	1	表紙墨書「第拾參号」. 下小口墨書「昭和六年十一月十一日ヨリ 第拾參号 金銭出納及日誌簿」
119/H/19	30	長男英信学資ニ関スル金銭控簿	明治41年3月27日ヨリ	貞方	書冊	1	表紙墨書「第壹号」
119/H/19	31	計算帳	明治42年10月24日	講親 貞方英信	書冊	1	表紙墨書「乙第參号」
119/H/19	32	金銭出納簿	大正4年2月11日ヨリ	平戸村岩ノ上免耕地整理 組合	書冊	1	表紙墨書「甲第貳号」. 下小口墨書「金銭出納簿」
119/H/19	33	日誌	大正3年1月1日ヨリ	北松浦郡平戸村大字平戸鏡川免四百三拾參番地 貞方文作	書冊	1	下小口墨書「日誌大口(正) 三年一月ヨリ」
119/H/19	34	森本氏金銭差引帳 親族会決議要領控	大正4年12月22日ヨリ	貞方	書冊	1	
119/H/19	35	昭和六年十一月佐賀県教育会台湾視察団旅行日程	昭和6年11月		紙	1	活版印刷

典拠：九州大学経済学部古文書119/H/19「平戸捕鯨会社記録」より作成。

4.5. 貝島家文書

本資料（119/K/39）は、大正・昭和期の貝島宗家で作成された「仕訳日記帳」や「総勘定元帳」といった家政関係の帳簿など 369 件から構成される。受入は 1973 年 3 月。貝島家は、大之浦炭鉱や大辻炭鉱など筑豊の有力炭鉱を手中に収めて事業を拡大し、麻生・安川と並び「筑豊御三家」と呼ばれた地方財閥である。本資料は、大正・昭和期の貝島宗家の家政などを考察する上で貴重なものとなる。

「貝島家文書」の受入は、秀村選三が中心となって行った。本資料と同時期に石炭研究資料センターに受け入れられた資料が、記録資料館産業経済資料部門に「貝島宗家資料」として保管されている。いずれも、貝島宗家の旧宮田町の建物が経営悪化などにより解体される際、現地調査を実施し、寄贈・受入に至ったものである。

5. 小括

小稿では、九州大学経済学部古文書について、その来歴と編成を検討し、主要な資料群について紹介を行った。なお未整理の資料が多く、課題も少なくないが、ここまでの分析内容を次のようにまとめておきたい。

まず、経済学部古文書の来歴については、本コレクションが 1920 年代から 1970 年代まで約半世紀におよぶ資料収集の成果として形成されたものであることが確認された。資料の収集において中心的な役割を果たしたのは経済史研究室とその歴代の教員であり、これを通じて、北部九州を中心とした江戸時代から近現代までの貴重な記録資料が残されることになったが示された。

次いで、資料の編成については、経済学部古文書が旧分類と呼ばれる図書分類法により編成され、図書と記録資料が混在する形で保管・管理されたことを指摘した。これによって、一部の資料群については出所が不明となるなどの問題点が生じた一方、請求記号や受入年月日、保管状況などを手掛りに資料群を復元できる可能性も認められた。

こうした基礎的な知見を踏まえ、最後に本コレクションの調査・整理を進めるにあたっての課題も指摘しておきたい。

一つは、経済学部古文書の整理・公開をめぐる課題である。上述の通り、本コレクションには、図書資料とともに、多様な性格を持った記録資料が含まれる。こうした複雑な内容を持つコレクションを整理・公開するにあたっては、それぞれの記録資料の特性に応じた保管・管理の実施はもとより、資料群ごとの来歴・

特徴やコレクション全体の構造的性質などの情報も記述化し、利用者へと提供することが求められる。そこにおいては、情報資源の保存・活用に対して長い歴史を持つ図書館学と、歴史資料に関する豊富な研究蓄積を有するアーカイブズ学・博物館学との協働が大きな力を発揮するはずである。今後、具体的かつ有効な協働の形の模索が必要となる。

もう一つは、経済学部古文書というコレクションをより幅広い文脈で位置づける必要性である。とりわけ、九州文化史研究所や石炭研究資料センターなど、九州大学内の資料収集活動との関係を中長期的な時間軸で検討することが求められよう¹⁹。こうしたアプローチは、戦前から現代に至るまでの大きな社会・経済の変動のなかで、大学がどのように地域社会が抱える困難な問題に関わっていたかを明らかにすることにもつながるはずである。これらの課題については筆者も引き続き取り組んでいきたい。

注記

¹ 代表的な収蔵資料については、九州大学百年の宝物刊行委員会編『九州大学百年の宝物』丸善プラネット株式会社、2011 年参照。

² 経済史研究室は、戦前は法文学部経済科第 4 講座、戦後に経済学部が独立して以降は、経済学部経済学科経済史講座、日本経済史講座に含まれる。

³ 筑豊石炭産業史年表編纂委員会編『筑豊石炭産業史年表』西日本文化協会、1973 年、典拠資料 280 号など。武野要子「釜惣文書」『福岡県百科事典 上巻』西日本新聞社、1982 年、p. 396。

⁴ 戦後になると、本資料群は日本経済史講座が設置した「古文書室」で保管・管理もされている。この意味で「経済学部古文書室旧蔵資料」とも呼ぶことができる。

⁵ 『九州大学七十五年史 通史』九州大学出版会、1992 年、pp. 34-35。

⁶ 以下、遠藤正男と宮本又次の略歴は、九州大学経済学部五十周年記念事業会編『筥崎松原の青春』同事業会、1978 年、pp. 482-484、『九州大学百年史 第 4 巻部局編 1』九州大学、2014 年、7 編、pp. 52-53、による。

⁷ 前掲『筥崎松原の青春』p. 485。

⁸ 以下、秀村選三の略歴は、前掲『筥崎松原の青春』p. 484、前掲『九州大学百年史 第 4 巻部局編 1』7 編、pp. 52-53。

⁹ 石炭研究資料センターへの保管場所の変更時期については、同センター長などを務めた東定宣昌氏よりご教示を得た。「経済学部古文書」は、当時センターの保管スペースとして利用されていた旧法文学部本館 1 階において保管された。経済学部の機構改革については、前掲『九州大学百年史 第 4 巻部局編 1』7 編、pp. 18-21、など参照。

¹⁰ 文系合同図書室に保管されている旧分類表による。なお、現在残されている旧分類表では、経済学部古文書の多くの資料に付された 090 や 119 の分類番号が未定義となっている。これらは古文書や史料集を図書とは別に分類するため、新たに設定されたものである。資料受入時の試行錯誤を示すものといえる。

¹¹ なお、資料群単位で請求記号が付与されている場合は、個別資料の情報は採録されていないケースが多い。将来的には細目録を作成する必要がある。

¹² 以下、釜惣文書（瀬戸文書）の概要は、武野要子「釜惣」、同「釜惣文書」『福岡県百科事典 上巻』pp. 395-396, による。

¹³ 『福岡県史 近世史料編 福岡藩町方（一）』福岡県, 1987年。『福岡県史 近世史料編 福岡藩町方（二）』福岡県, 1991年。

¹⁴ 『筑前国革座記録』上巻, あとがき, p. 11.

¹⁵ 『筑前国革座記録』上巻, 解題, pp. 1-5. 「筑前国革座記録」の各巻の朱書や修正の痕跡, 紙背文書の状態から, 本史料が革座をめぐって対立が深まるなかで, 柴藤増次家が自己の正当性を主張するために編纂されたことが例証されている。

¹⁶ 『九州大学教養部玉泉館所蔵三苦文書目録』九州大学附属図書館教養部分館, 1972年。

¹⁷ 分家の三苦家で史料調査を行っている際, 本家にも資料があるという話を聞き, 調査を実施した結果, 寄贈を受けたものという。

¹⁸ 「三苦家文書」と同様に, 旧分類の請求記号によって資料群の出所が曖昧となったものに, 福岡藩家老鎌田家由来の資料がある (110/K/31 など)。これについても同一の出所と推定される資料は, 受入年月日 (1930年12月10日) が共通しており, 受入印が資料群を比定する手掛りとなる。今後は内容も精査した上で資料群を復原・確定する必要がある。

¹⁹ こうした分析視座は, 梶嶋政司氏にご教示を得た。

[付記] 本報告にあたっては, 図書分類法などについて, 文系合同図書室・宮岡大輔係長よりご教示を得ました。また資料の来歴や受入経緯については, 秀村選三先生, 東定宣昌先生にご教示を頂きました。さらに本調査の実施するにあたっては, 図書館職員の方々を作成されてきた図書カード・書誌情報などに多く依拠しました。関係する皆様に末筆ながら御礼申し上げます。ただし, あり得べき誤りは全て筆者に帰します。



本著作の著作権は著者に帰属します。注があるものを除いて, 本著作の内容物はクリエイティブ・コモンズ表示-非営利-改変禁止4.0 国際 (CC BY-NC-ND 4.0) ライセンスの下に提供されています。

<https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja>